

資料

山口県立大学看護学部学生の進学動機について

中谷 信江* 木戸久美子* 林 隆*

要約

進学動機を考慮した教育の指針を検討するために、本学に入学してきた学生達の進学動機を明らかにすることを目的に質問紙調査を実施し、以下のことが明らかになった。

1.看護に進学した動機で「当てはまる」「やや当てはまる」と答えた人が7割を超えた項目は、“卒業後看護職(看護師・保健師・助産師)になりたいから”“手に職を付けたかったから”“就職に困らないと思ったから”“収入が安定している”“看護学に興味があった”“人の役に立ちたかったから”の6項目であった。

2.山口県立大学看護学部に進学した動機で「当てはまる」「やや当てはまる」と答えた人が7割を超えた項目は、“公立で学費が安い”“公立の学校だった”“4年制である”の3項目であった。

キーワード：進学動機、看護学、大学、学部学生

I. はじめに

近年、本邦における看護教育は大学における教育が主流となってきた。これまで短期大学や専門学校へ進学する学生は看護師になるということが大前提に、入学してきた¹⁾。さて、看護の大学を志望してくる学生の進学動機については報告も少ないが、短期大学や専門学校に進学する学生とは異なっているのではないかと考えられる。進学動機は大学における学習意欲や適応に影響する²⁾と言われている。大学へ進学してくる学生の動機を確認した上で個々の学生にあった指導を展開することができれば、学生の看護学を学ぼうとする意欲を低下させることなく教育できるのではないかと考えた。そこで本調査は、進学動機を考慮した教育の指針を検討するために、本学の学生達の本学への進学動機を明らかにすることを目的として実施することとした。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は、休学中の学生を除く本学部在校生全員175名である。また編入生は学部生の進学動機とは質的に異なると考え本調査対象から除外した。

2. 調査方法

調査には自記式質問紙法を用いた。調査項目を策定するためには、在校生6名にインタビュー調査を実施し、そ

のインタビュー内容から逐語録を作成した。その内容と太田らの先行研究³⁾を参考にして質問項目を設定した。調査項目の内容は、対象者概要、入学状況(入試の形態・受験する際の第一志望)、進学動機である。進学動機については、「看護に進学した動機」14項目、「山口県立大学看護学部を選択した動機」30項目について、「当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「やや当てはまる」「当てはまる」の5段階のリッカートスケールを用いて回答を求めた。倫理的配慮として、研究目的・匿名で個人が同定されないことを文書にて説明し、質問紙の回答をもって研究承諾と了解した。調査は平成15年4月に行った。

III. 結果

1. 回収及び有効回答

有効回答数は155名(88.6%)であった。各学年の有効回答数とその学年内の割合は、1年44名(100%)、2名(95.4%)、3年40名(93.0%)、4年29名(65.9%)で、4年生は有効回答が低かった。

2. 対象者概要

①年齢は、18歳33名(21.3%)、19歳38名(24.5%)、20歳34名(21.9%)、21歳38名(24.5%)、22歳以上30歳未満10名(6.3%)、30歳以上1名(0.6%)であった。②性別は、男性11名(7.1%)、女性144名(92.9%)であった。③

卒業した高校課程は、全日制154名(99.4%)、通信制1名(0.6%)であった。④卒業した高校科別は、普通科136名(87.7%)、理数科6名(3.9%)、衛生看護科4名(2.6%)、その他9名(5.8%)であった。

3. 入学状況

入試の形態は、県内推薦45名(29.0%)、県外推薦9名(5.8%)、自己推薦6名(3.9%)、社会人6名(3.9%)、前期66名(42.6%)、後期22名(14.2%)であった。受験する際の第一志望は、入学形態の別で結果が異なったため、結果を入学形態別に表1に示した。全体では、山口県立大学看護学部が84名(54.5%)、山口県立大学他学部が1名(6%)、他大学看護学部48名(31.2%)、他大学他学部19名(12.3%)、専門学校看護科2名(1.3%)であった。入試形態別では、“山口県立大学看護学部が第一志望”の割合は、県内推薦・社会人では40名(88.9%)・5名(83.3%)と高いのに対し、前期・後期では28名(42.4%)・6名(27.3%)と受験する際の第一志望が山口県立大学看護学部以外の割合のほうが多いという入試の形態を如実に表す結果であった。また本大学本学部の特徴的な入試制度である県外推薦・自己推薦については、“山口県立大学看護学部が第一志望”割合は自己推薦4名(66.7%)と多いものの、県外推薦では1名(11.1%)と前後期よりも少なかった。

表1 入試の形態と受験する際の第一志望

第一志望 入試形態	山口県立大学 看護学部	山口県立大学 他学部	他大学 看護学部	他大学 他学部	専門学校 看護学科
県内推薦	40(88.9%)		4(8.9%)		1(2.2%)
県外推薦	1(11.1%)	1(11.1%)	4(44.4%)	2(22.2%)	1(11.1%)
自己推薦	4(66.7%)		2(33.3%)		
社会人	5(83.3%)		1(16.7%)		
前期	28(42.2%)		29(43.9%)	9(13.6%)	
後期	6(27.3%)		8(36.4%)	8(36.4%)	

4. 看護に進学した動機

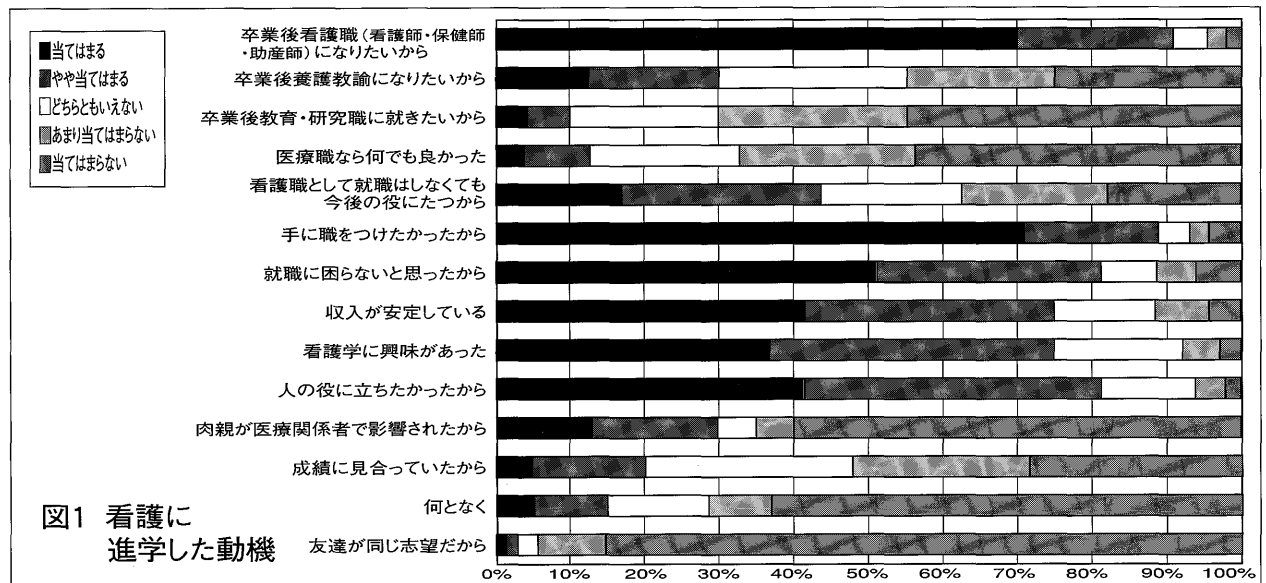
看護に進学した動機の結果を図1に示した。

「当てはまる」「やや当てはまる」の二つを合わせた人数の最も多かった項目は、“卒業後看護職(看護師・保健師・助産師)になりたいから”141名(91%)であった。他卒業後の進路の項目では“卒業後養護教諭になりたいから”46名(29.7%)、“卒業後教育・研究職に就きたいから”15名(9.7%)であった。一方“医療職なら何でも良かった”は20名(12.9%)であり、“看護職としては就職しなくても今後の役に立つから”と言う意見も67名(43.2%)と4割強であった。

また、人数が多い項目として、“手に職をつけたかったから”138名(89.1%)、“就職に困らないと思ったから”126名(81.3%)、収入が安定している”116名(74.9%)や、内的な項目である“看護学に興味があった”116名(74.9%)“人の役に立ちたいから”126名(81.3%)があった。

そして、“肉親が医療関係者で影響されたから”47名(30.3%)、“成績に見合っていたから”31名(20%)、“何となく”22名(14.2%)という結果であった。“友達が同じ志望だから”は、2名(1.2%)と少なかった。

詳細な結果を見ると“卒業後看護職(看護師・保健師・助産師)になりたいから”“卒業後養護教諭になりたいから”では、「当てはまる」「やや当てはまる」に重なっている人が40名(25.9%)いた。また、“卒業後教育・研究職に就きたいから”は“卒業後看護職(看護師・保健師・助産師)になりたいから”で「当てはまる」「やや当て



はまる」と100%重なっている。それら3項目に「当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらでもない」と答えた人が8名(5.2%)いた。

5. 山口県立大学看護学部を進学した動機

山口県立大学看護学部を選択・進学した動機の結果を図2に示した。

大学の特徴の中で“公立の学校だった”125名(80.6%)、“4年制である”122名(78.7%)は8割程度で多く、“単科大学ではない”は70名(45.2%)と半数程度、“大学院がある”は9名(5.8%と少なかった。また看護学部の特徴では、“看護学部として独立している”は44名(28.3%)、“助産師過程がある”は65名(42%)であった。“有名教授がいる”“外国人が教員にいる”“在校生に男子学生がいる

”という項目は人数が少なかった。一方、施設・環境面では、“施設が新しい”90名(58%)“建物がきれいで設備が充実している”87名(56.2%)と5割を超えたが、“自然環境がいい”48名(30.9%)、付属病院がないは7名(4.5%)、学生寮があるは19名(12.3%)であった。反面、“教育カリキュラムが充実している”“理念や精神に共鳴した”“校風がいい”は、すべて49名(31.6%)と3割程度だった。

経済面では、“公立で学費が安い”は140名(90.3%)と項目中で最も多く、“県内者は入学金が安くなる”も64名(41.3%)であったが、“生活費が安い”は33名(21.3%)であった。また、“出身県または出身県に近い”が98名(63.2%)、“県内で就職したい”が50名(32.3%)だった。

入試の面では、“推薦入試制度がある”59名(38%)、“受験勉強が楽だった”39名(25.2%)、“偏差値を見て決めた”58名(37.4%)“センター入試の結果で仕方なく”45名(29%)と2~4割であった。

また、“人に勧められた”という回答が46名(30%)だった。

IV. 考察

1. 看護を選択した動機から考察する教育の指針

看護を選択した理由の結果から、大学ではあっても“就職に困らず”“収入が安定している”“手に職をつけたい”ということが満たされる職業である“看護職(看護師・保健師・助産師)になりたい”と考え、看護を選択している人が多いということが明らかになった。看護職の資格取得は絶対の教育の課題であり、就職できることが重要であると言える。

また、看護学部を選択した動機で“看護学に興味があった”“人の役に立ちたかった”という答えも多かった。その動機は内的なものであり、学習意欲に影響する非常に重要な要素である²⁾。“看護学に興味”“人の役に立ちたい”という心理的なものを常に刺激し、維持できるようにすると、学習効果も向上するのではないかと考えられる。その方法の一つとして、実習で対象者と出会い少しでも役に立ちたいという思いを刺激しつつ、講義・演習を展開していくという方法が有効なのではないかとも思われた。また、実習等でも役に立ちたい、役に立っているという意識を持たせることができ

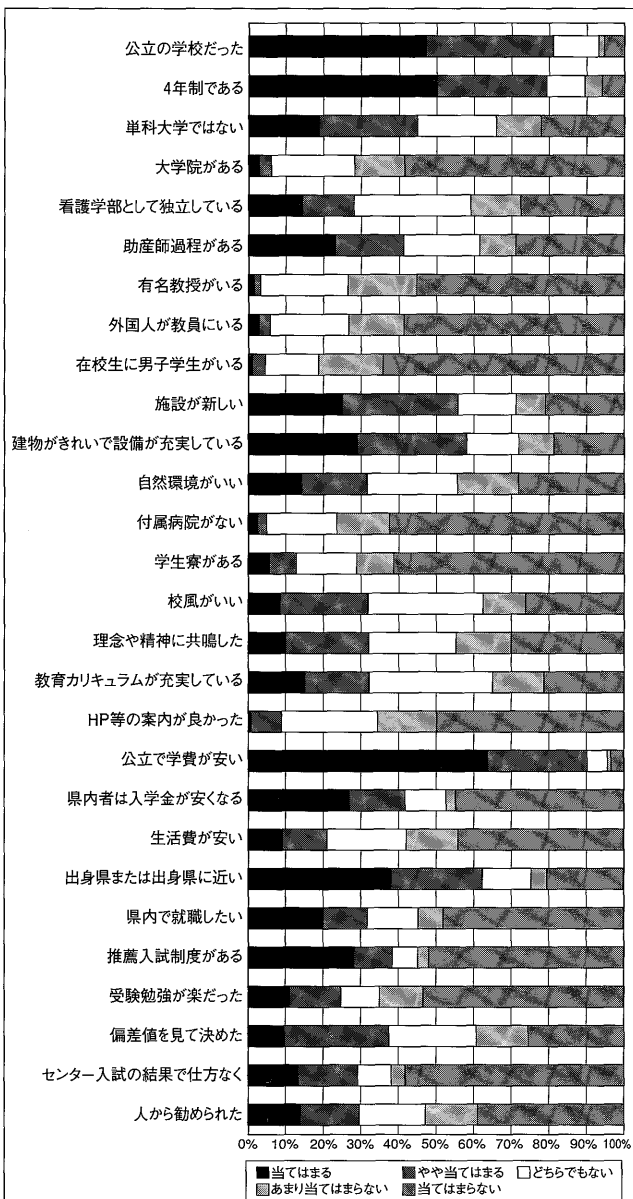


図2 山口県立大学看護学部を選択した動機

るように教員も配慮することが必要であると考えた。

今回の調査では、志望する看護職を3つの職種に分けていなかったことから、入学時点で看護職の中でどれかに絞ってきているのかという点については明らかにすることはできなかった。しかし“看護職（看護師・保健師・助産師）になりたい”と“養護教諭になりたい”人が重なっていたこと、本学への進学理由として“助産師課程がある”が4割程度もいたことから、できるだけ多くの資格を取りたいという希望もあると考えられ、まず大きく看護を選択し入学後にどの看護職になるか決めたいと考えている学生も多いと考えられる。入学後学生に対して個々がどの看護職になるのかを決定していくための援助も重要であると思われた。学生個々が希望する看護職について理解を深め考える時間的余裕も必要であろう。

一方、看護を選択した理由が“肉親が医療職で影響されたから”という学生も多くおり、“医療職なら何でも良かった”や“何となく”という学生もいる事が明らかになった。石井³⁾は、大学・学部選択にあたって「親や教師に勧められた」学生は専攻への低適応を起こす要因の一つであり、保健・看護学系において顕著に見られると述べている。看護学を学ぶ意欲が低下する可能性のある学生に対しては、看護の魅力を訴える教育が必要であろう。反面、彼らの葛藤をくい止めるのはたやすいことではない。多大な教員の労力を費やすよりも他の道の選択を促す援助も選択肢の一つかもしれない。

2. 山口県立大学看護学部を選択した動機から考察する教育の指針

一番に言えることは、“公立で学費が安い”であり、“県内者は入学金が安くなる”も64名(41.3%)と県内者の数から考えると割合は高く、学費における経済面が本学入学の学生にとっては重要な進学動機であることが明らかになった。本学は独立法人化していくが、学費の維持は重要課題である。

次に、“公立大学だった”“4年制である”という回答が8割程度と多かった。一方、“校風がいい”“理念や精神に共鳴した”“教育カリキュラムが充実している”という回答の割合が3割程度と少なかった。この回答からは、“校風”“理念や精神”“教育カリキュラム”というよりも“公立”“4年制”ということで本学本学科を選択していることが伺

える。これは、受験の際の第一志望が、本学本学部志望ではないという人が多いことから推察され、現時点では、看護を選択し、“公立”“4年制”の中から成績の見合ったところに進学をするという入学制度が反映している結果である。以上のことから、現在の入学生は本学本学部の“校風”“理念や精神”“教育カリキュラム”について熟知しているとは言い難く、まずそのことを理解してもらう必要があると言える。

そして、地域の大学の特徴である“出身県または出身県に近い”が6割程度、“県内で就職したい”が3割程度と高い結果によって、地元志向の学生が本学を志望してきているということが再確認され、この特徴は大いに生かし、充実させていく必要があるだろう。また、大学の環境・施設面については“建物がきれいで設備が充実している”や“施設が新しい”という理由は半数を超えたのに対し、“付属病院がない”というのはごく僅かであった。施設が新しく設備が充実していることを最大限に生かしつつ“付属病院がない”というデメリットを補う方策を考えていく必要がある。

研究の限界

本調査質問紙は、過去の内容を問うものであり、2～4年生は、記憶に頼らざるをえないため、記憶に今までの経験が影響し、答えた内容が当時とは変化している可能性が考えられる。しかし、自分が考えて決めた大変興味の高い内容のため、過去の記憶とはいえ信頼性は高いと判断する。また、4年生は有効回答率が低いバイアスが生じている可能性もある。

V. まとめ

山口県立大学学生の進学動機を調査した結果、以下のことが明らかになった。

1. 看護に進学した動機で「当てはまる」「やや当てはまる」と答えた人が7割を超えた項目は、“卒業後看護職（看護師・保健師・助産師）になりたいから”“手に職を付けたかったから”“就職に困らないと思ったから”“収入が安定している”“看護学に興味があった”“人の役に立ちたかったから”の6項目であった。

2. 山口県立大学看護学部に進学した動機で「当てはまる」「やや当てはまる」と答えた人が7割を超えた項目は、“公立で学費が安い”“公立の学

校だった” “4年制である”の3項目であった。

引用・参考文献

- 1) 河村彰子、中川雅子、藤田淳子他：看護学生における看護婦のアイデンティティ形成と志望理由・学習進捗との関係、京都医大医短紀要、10、91-99、2000.
- 2) 石井秀宗、椎名久美子、柳井晴夫：看護大学生の学習活動と学習意欲に関する研究、Quality Nursing、9(11)、48-62、2003.
- 3) 下中邦彦編：新教育の事典、617-619、平凡社、1979.
- 4) 尾嶋史章編著：現代高校生の計量社会進路・生活・世代、京都、ミネルヴァ書房、2002.

Title : Motives for going to Yamaguchi Prefectural University

Author : Nobue Nakatani*, Kumiko Kido*, Takasi Haysasi*

*School of Nursing, Yamaguchi Prefectural University

Key words : Motives for going University, Nursing, University, under graduate student
